特集 もう一つのヒロシマ

昭和20年8月6日、原子爆弾が広島市に投下され、62周年を迎えました。

原爆投下時、現在の山内小学校に急設された病棟に、多くの軍関係被爆者が運ばれ、山内地区の住民が一丸となって、被爆者の手当て・看護に従事しました。

そこには、被爆地ヒロシマを支えた「もう一つのヒロシマ」の姿が見えてきます。

山内原爆被害者の会の証言から当時を振り返り、平和について考えてみましょう。

被害者の会の役員（右から加藤照明さん、土井昭二さん、山本智洋さん、福山権二さん）

山内で被爆者を収容

（被爆体験記「葛城（かつぎ）」から抜粋）

広島市に原爆が投下されてから3日後の8月9日、広島陸軍病院から「本日15時頃の列車で被爆者を輸送するので、その受け入れ準備を完了しておくように」と緊急連絡が、当時の山内西村役場にありました。

さっそく役場が中心となって、山内西国民学校を病棟にし、山内地区の国防婦人会、大政翼賛会、翼賛壮年団の協力によって受け入れ体制を整えました。

被爆者を乗せた列車は山内駅に到着し、274人の被爆者が下車しました。これらの被爆者は、広島市内で被爆後、徒歩で避難し芸備線沿いの戸坂小学校に収容された人たちでした。広島近隣の学校施設などに収容しきれない人数になり、陸軍病院の判断で県北部に輸送されたのです。

山内西国民学校の臨時病棟は、現在の山内小学校プールの位置にありました。2階建て校舎で1階に重症者を、2階に軽症者を収容しました。

動員された山内地区国防婦人会の人たちは、炊事、洗濯をはじめ、悪臭がただよう病棟内で、排便の始末、傷の手当て、食事の世話など、献身的な奉仕活動を毎日繰り返しました。

すさまじい被害者の現実を前に、地域住民からは、農産物や高価な客人用寝具が惜しげ気もなく提供されました。また、見舞いに来た家族の宿泊を受け入れ、看病する家族を支えました。

毎日、5人、8人と無念の最期を遂げられた方々は88人にのぼり、山内西国民学校裏の葛城山麓の臨時火葬場で火葬されました。

この病棟は、開設後、53日目の9月30日に閉鎖しました。

翌年から慰霊行事

あまりにも痛ましい悲惨な被爆者の最期に接し、献身的な看護に全力をあげた山内地区の婦人会の皆さんは、地域住民の協力を仰いで、翌年からお盆には毎年欠かすことなく被爆者の終焉（えん）の地を清掃、香華をたむけ、慰霊の行事を続けてきました。

そして、13年後の昭和33年3月、婦人会の皆さんが中心になって、区民と協議し、山内西地区全戸に寄付を呼びかけ、市からも補助金を受け、原爆犠牲者の慰霊碑を建立しました。この慰霊碑前では、毎年8月6日、原爆投下の日に遺族を招待し、山内地区社会福祉協議会の主催で慰霊の行事が開催されています。

証言1

遺骨を胸に泣きながら校門去る 家族の姿は忘れられない

── 駅から被爆者を運ぶ

山本　智洋さん（木戸町）

夏休みに召集

昭和20年8月9日、当時私は山内西国民学校高等科1年生（現在の中学校1年生）でした。ちょうど夏休みでしたが、学校から「13時までに登校せよ」と連絡が入り、登校しました。

登校したのは高等科1・2年生全員でした。グラウンドに集合した私たちに校長先生は「8月6日に、広島駅付近に小さな爆弾が落とされた。多くの負傷者がでて、広島の病院だけでは収容できないので、この学校の一部が仮の病院になることになった。そこで今日の臨時列車で、負傷された兵隊さんが300人くらい運ばれて来るので、諸君は、担架で駅から学校まで運んでもらうことになった。負傷しておられるので注意することと、水を欲しがられても絶対与えてはいけません」と話しました。

山内駅で待っていると、兵隊さんを乗せた列車が入り、ホームに次々と負傷した兵隊さんが降りてきました。頭髪は長く乱したままで、顔は水ぶくれになり、衣服は破れ、両腕の肘から手の甲にかけて皮膚がむけていました。何両編成か覚えていませんが、後方が貨物列車になっていて、重傷の兵隊さんが雑魚寝の状態で横たわっていました。その時の異臭と、兵隊さんが重かったことを覚えています。

こんなひどい目にあったのに、小さな爆弾かと不思議に思いました。当時の学校の先生は、士気が下がってはいけないと、大変な被害を受けても「損害軽微（けいび）」と言って、真実を教えてくれませんでした。

まるで生き地獄

自力で歩ける兵隊さんは、10メートルも歩くと前から順番に道に座り込まれ、その度に、軍刀を手にした将校さんが「立てー」と大声で命令すると、スーっと立ち、手を胸の前まで上げ、だらりとして歩く姿は、正に幽霊のようでした。

なぜあんなに厳しくされるのか、休ませてあげたらよいのに・・・と思いました。

6人1組で私たちの班は、4人の兵隊さんを運びました。その中の一人は途中で「生徒さん学校はまだか」と何回も小さな声で聞かれましたが、学校についたときには亡くなられていました。あの時の声が耳について寝つかれない日が何日か続きました。水をひどく欲しがられる兵隊さんもありました。男女の区別がつかぬほどに焼けただれた2・3人が私たちに「ありがとう」と声をかけられ、その声で、女性だと分かりました。ヤケドで膨れ上がった体に、ボロボロになった衣服がついているだけです。それはまるで生き地獄を見るようでした。

その後、私たちは夏休み中でしたが、交代で登校して死体の運搬などの仕事に当たりました。学校の裏山に穴を掘って死体を焼かれました。2学期が始まり9月下旬頃まで、その焼き場で死体を焼く煙が絶えませんでした。今日も、今日もというように、遺骨を胸に泣きながら校門を去る家族の痛ましい姿は、今もはっきり記憶にあります。

2度とこうした悲惨な戦争をしてはならない、平和を守らなければいけないと、教職員時代は毎年子どもたちに語り継いできました。

原爆の絵（広島平和記念資料館提供）

証言2

姉妹を失った悔しさ、山内病棟で胸を熱くした思いは忘れられない ―山内病棟で看護

谷口 文江さん（高茂町）

原爆投下の一週間前に庄原へ

昭和15年、尋常高等小学校を卒業し、口和から広島市へ出ました。個人病院で働きながら独学で看護婦の免許を取得。その後、姉の陸軍病院に勤いる広島第一陸軍病院に勤務しました。現在の広島市民球場の位置にあり、後に原爆ドームとなる産業奨励館を毎日見ていました。陸軍病院は、戦場から帰って来た負傷兵を受け入れる施設で、日本が勝つためにと、一生懸命に看護に専念しました。

だんだんと戦争が激しくなり、陸軍病院も広島郊外に疎開をするよう命令がありました。庄原で患者を受け入れる準備をするため、昭和20年7月29日に庄原病院（現在の庄原赤十字病院）へ行きました。隣接する庄原小学校（現在の市民会館）にベッドを運ぶなど、受け入れ準備に汗を流していた8月6日、原子爆弾が投下されました。庄原病院から広島市方面を眺めると、黒い煙が見えたのを覚えています。

原爆の絵（広島平和記念資料館提供）

戸坂小へ救援に向かう

「ピカドンが落ちて大変じゃ。広島へ応援に行ってくれ」と命令を受け、8月8日にチームを編成し、戸坂小学校へ救援に向かいました。

戸坂駅に下りると、近くで死体を火葬していたのか異様な悪臭がしていました。

原爆の絵（広島平和記念資料館提供）

戸坂小学校に着くと、あまりにも悲惨な状況に頭が真っ白になりました。校庭の大きなテントには死体が積み重ねられ、周りは重症患者でいっぱいでした。その様子は口では表現できません。まるで地獄絵図に描かれたひどい状況でした。

陸軍病院で、両手足を切断した兵隊さんが水瓶に入れられて帰ってくるなど、涙がでる悲惨な状況をたくさん見て来た私でしたが、声も出ませんでした。衣服はボロボロで裸同然、ヤケドがひどく、意識のある人は皆、「水」「水」と水を求めていました。ヤケドの患者に水を与えると、下痢を起こし危険な状態になるので、水は与えられません。看護といっても、薬もなく、ただ見回るだけで、手のほどこしようがありませんでした。この中に、市内で看護婦をしていた2人の姉妹がいるかもしれないと、大きな声で名前を呼びましたが、被爆者は皆、顔が腫れて返答はありませんでした。

山内で昼夜なく看護

翌日、山内西国民学校が臨時病棟になるということで、被爆患者と一緒に庄原へ帰りました。2人の姉妹の安否が気になり、後ろ髪を引かれる思いで戸坂小学校を離れました。

山内病棟では、被爆患者の治療に一生懸命、昼夜なく看護に勤めました。しかし、その甲斐なく次々と亡くなっていかれ、残念な思いを何度となく味わいました。

重傷者を収容した1階では、背中にヤケドを負っている人が多く、皆うつ伏せの状態で横たわり、チンク油と赤チンを調合したものを、傷に塗りました。だんだんと乾燥してくると、その周りの皮膚を引っ張るので「痛い」「痛い」と叫ばれていました。また、暑かったので、傷口にウジがびっしりとわき、「痛い」と叫ばれる中で、ウジをとるのはつらい作業でした。脳障害を起こし、夜中に叫んだり、歩けない患者が無意識で徘徊したり、当分の間、仮眠をとることもできませんでした。山内地区の婦人会の皆さんは、炊き出しが主な作業でしたが、「被爆患者を看てあげたい」と、私たち看護婦と一緒になって看護に尽くされました。「汚い」とか「臭い」とか、愚痴をこぼさず手伝っていただき、本当に助かりました。

2階に収容された軽症患者も、突然髪が抜け、亡くなる人もいました。この頃から、ずっと気になっていた姉妹の生存をあきらめるようになりました。62年経った今も、何一つ姉妹の物はでてきていません。

姉妹を失った悔しさ、山内病棟で胸を熱くした思いは一生忘れることはできません。次の世代に二度とこんな思いを経験させてはいけないと強く願っています。

次世代に原爆体験を語り継ぐ使命

山内地区原爆被害者の会

原爆被害者の会を結成

昭和33年から本格的な慰霊祭が始まりましたが、近年、お年寄りも坂道を上がることがつらくなり、だんだんと参列する人が減ってきました。また、理事会で「慰霊祭をやめよう」という声も上がり、山内の被爆体験が風化してしまうと危機感を募らせた被爆者は、平成13年、山内地区原爆被害者の会（加藤照明会長）を結成しました。

会員は、原爆による被害のすさまじい実態、実相をしっかり次の世代に継承しなければいけないと、被爆体験記の発行や体験の継承活動、山内地区原爆慰霊祭への協力など、さまざまな活動を続けています。

広報紙を編集する役員

被爆体験を継承

被爆体験記「葛城」は、会員の被爆体験を取りまとめて平成14年に第1号を発刊。約500部を印刷し、地域住民をはじめ、遺族や市内の小・中学校、図書館などに無料配布しました。また、山内で一命を取り留めた被爆者を訪ねて、県内をはじめ関西・岡山方面まで出かけて聞き取り調査を行い、平成15年に第2号を、平成16年に第3号を発行しました。約60年の時を経て、その当時の様子が明らかになりました。

「面談した人の中には、今でも被爆者であることを隠したいという強い思いの方もおられ、原爆の傷跡は60年以上を経た現在でも重く深く残っていると痛感した」と役員は話しています。報道機関によって、山内の被爆体験が広く紹介されると、その反響も大きく、全国各地から問い合わせが相次ぎました。

被爆者から「山内の皆様、故人になられた方も多いかと存じますが、その節は本当にお世話になりました。当時の想い出、皆々様のご恩は一時として忘れたことはございませんでした」と、心のこもった礼状も届きました。

被爆体験記「葛城」は、第3号を完結編とし発行を終えましたが、現在でも定期的に広報紙を発行し、悲惨な実態を継承し続けています。

慰霊祭の継続が責務

「被爆者の回復の願いを込め、負傷者の手当・看護に従事した山内地区の先人を誇りに思います。また、60年以上慰霊祭を続けてきた、山内地区を誇りに思います。これを続けていくのが我々の責務です」と役員は口を揃えます。

毎年8月6日は社会福祉協議会が主催する「慰霊祭」終了後、山内地区原爆被害者の会が、被爆者や遺族との交流会を行っています。

「二度とあんな悲惨なことがあってはならない。特に、若い世代に核兵器の恐ろしさを伝えていきたい」。山内地区原爆被害者の会は強い思いで、活動を続けています。

被爆体験記「葛城」

庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表すとともに、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久平和を祈念するため、庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典を下記のとおり開催します。

多くの皆さんの参加をお願いします。

と　き　8月22日（水）10時～

ところ　庄原市民会館

※当日は要約筆記による案内、各支所からの送迎バスをご用意しています。また、イントラネットでの中継も行いますので、各学校、公民館（自治振興センター）などで式典をご覧いただけます。

送迎バスの利用は、8月15日（水）までに各支所へ申し込んでください。

（定員に限りがありますので、ご希望に添えない場合はご了承ください。）

【問い合わせ】

社会福祉課障害者福祉係	☎0824-73-1210
西城支所保健福祉課	☎0824-82-2202
東城支所保健福祉課	☎08477-2-5131
口和支所市民生活課	☎0824-87-2114
高野支所市民生活課	☎0824-86-2114
比和支所市民生活課	☎0824-85-3002
総領支所市民生活課	☎0824-88-3110

山内自治振興区が平成17年度、庄原市自治振興区活動促進補助金を活用し、地域の平和のシンボル的拠点である原爆慰霊碑周辺を整備しました。

山内地区社会福祉協議会が主催する原爆犠牲者慰霊祭。遺族をはじめ、山内・水後小学校の児童、地元住民など毎年約100人が参列して行われています。

原爆犠牲者慰霊祭終了後、山内自治振興センターで遺族と地元住民による交流会が行われています。